

福音の少年外伝 移動図書館の日

加地尚武

イグニス・ストラタスが「それ」に出会ったのは、彼がこの風変わりな宇宙に生まれてから四地球年経ったころだった。

彼の記憶にある「それ」は、暗い谷と紫色の空と間に引かれた大きな斜めの線である。その線がさらに大きなある図形の一部を成していることにイグニスが気がつくのは、さらに十二地球年後のことだった。

四地球歳のイグニスは、空を見上げすぎて首が痛くなってしまう、図形の全体像に気がつくどころではなかった。空を、わけのわからない巨大なものが覆っているのである。

それは途方もなく大きな「何か」だった。大小並んで空をゆく二つの太陽をすっぽりと覆い隠している。言葉が浮かばなかった。大きく、不吉で、見ているとだんだん

不安になってきて、ぼんやりとした光を放っているのである。おまけに、その光はゆらめいていた。暗い海の中に漂うクラゲのような生物が放つ不安定な光に見えた。

あのなかにいるんだ！

あのなかにいるんだ！

頭の中にその言葉が繰り返して響いていた。声にならない自分の声は怖くてたまらない。「あの中」、あの球体の中に「いる」のだ。まばゆい陽光の向こうに広がる白い砂浜のように、ひっそりとぼくを待っているんだ！

そのとき、呆然と突っ立っているイグニスの小さな手を、大きな大人の手が包み込んだ。「クヴィントス先生」の手だった。教師はイグニスの手を掴んだまま、空を覆うものから広場に伸びている光の束に向かって歩く。

「いやだ」幼いイグニスは舌足らずの声で抗議する。空に満ちた光がぐるぐると回り出す。

「やだよ」彼は首を振りながら繰り返した。恐ろしい勢いで自分を取り囲む世界が回転しはじめたからだ。しかし抵抗もむなしく、彼はその光の束の中に引きずられるようにして連れて行かれそうになった。

そこで記憶が途切れるのである。

十二地球年後のイグニス・ストラタスは目を開けたまま、欠けた記憶の一片を探し求めた。次の瞬間、オレは、走っていたつけ。イグニスは思い出す。あの、オムニシア記念門をくぐって、オレは、家の方角目指して走っていたんだ。頭の中には、あの怖い、空を覆うものが、暗い影を落としていた。泣いていたのかもしれない。オレ、小さい頃、臆病だったからな。なぜ、あんなものを怖がったりしたのだろう。……ただの図書館なのに。

「——いいかね？ 質問はひとつだけだぞ」記憶の中の教師よりもやや小さくなったクヴィントス先生は、細長い右手のひとさし指を軽く立てて言う。それが、この境界

の惑星唯一の学校の教師の癖なのである。

イグニスにはわれに返り、周囲を見回した。「8455A.A.」つまり、『来訪』から八千四百五十五年後のいま、辺境の惑星にあるただ一つの街。その街のほぼ中央にある広場を挟む両脇の暗い谷が、淡い紫色の空に向かってそびえ立っていた。

惑星の正式名称は十六桁の文字列であった。しかし、無数の辺境惑星と同じように、この惑星を開拓した「デープダイバー」たちは、深宇宙を旅する自分たちのマイルストーンたる惑星を愛称で呼んでいた。「オムニシア」というのがそれである。その名は、惑星にただ一つある大きな集落と同じ名前である。つまり、オムニシアは惑星唯一の街であり、同時に惑星の名前でもあった。

そのオムニシアの広場に、たった二十名の生徒たちが、やせた教師を取り囲むようにして群れをなしている。イグニスは彼らから少し離れたところに立っていた。変身して翼を出したときに自然に背中がぱっくりと裂ける流行のバイオスーツを着て、ぼんやりと崖に区切られた空を見上げている。

魔法境界越しの空は、紫色だった。南中高度に近づきつつある近接連星が、右手の崖の上に仲良く現れていた。この街の経度に過酷な真昼が訪れようとしているのだ。

「……イギー、二度目なんだよね？」年下のアロンという少年が、イグニスを見上げて声をかける。イグニスのことを「イギー」と呼ぶのは母親とアロンだけだった。

「覚えてねーよ」イグニスは低い声で答えて、首を振る。小麦色の顔から突き出ている赤い髪が左右に揺れた。

「それに、オレのことを『イギー』って呼ぶな」イグニスは言った。

「ごめん、癖になっちゃって……それより、ほんとに覚えてないの？」イグニスよりも頭ひとつ背の低いアロンはあどけない表情を浮かべて言う。

「コイツは物覚えがわるいんだよ、アロン。期待しちゃダメ」
イグニスとアロンの背後から、明るい声がする。

「オメーは覚えてるのかよ？」イグニス は振り返らずに言った。

「もちろん」彼らの背後に立っていたラーラ・ポムンは腰に手を当てて言った。背の高いやせた少女である。浅黒い肌に鮮やかなオレンジ色の短い髪。可視光線の波長を拡張した銀色の瞳。「——自分がなにを質問したか、どんな答えだったのか、ちゃーんと覚えてる」ラーラは、振り返って自分を見上げているアロンに向かって言った。

「へえー」アロンは声を上げる。

「しずかにしたまえ」クヴィントス先生は枯れた声を張り上げる。「ではみんな、一時間後に集合だ。身なりをきちんとするんだぞ……解散」

アロンをはじめ、生徒たちは一斉に魔法で飛び立った。それぞれ住み家に帰り、よそ行きの服に着替えたり、質問を暗唱したりするのだろう。

「帰らないの？」広場に残ったラーラは、同じように突っ立っているイグニスに言った。

「……オレ、あときは——十地球年前は、図書館の中には入らなかったんじゃないかな？ そうだろ？」イグニスはラーラの質問に答えずに、そう言った。

「それは——」ラーラは言いよどむ。

「あの頃から君はわたしを手こずらせてばかりだよ」ふいに教師のクヴィントスが近づいてきて、イグニスに言う。

「オレは図書館の中に入ったんすか、先生？」イグニスは言う。

「覚えてないということは、たいしたことがなかったということだ。そんなことを気にするな」クヴィントスは大げさに肩をすくめてみせる。

教師が飛び去った後も、イグニスは考えていた。

「——ほんとに覚えてないんだ？」ラーラは再び声をかける。

「うん」イグニスは素直にうなずく。「なあ、十二年前、オレって、どうしたんだよ？」

そう言ってイグニスは一ララの銀色の瞳を見つめた。

「……知りたい？」一ララは上目遣いにイグニスのとがった顔を見つめながら言った。一ララの横長の目に、いたずらっぽい光が宿っている。

「教えてくれ」イグニスは言った。

「勝つたらね」一ララは唇の端に笑みを浮かべた。

「……またかよ」イグニスは顔をしかめる。

「そんなことだから、勝てないのよ。ほら、家に帰らないんでしょ？ 一時間もあらず一ララは早くも両手を組み合わせて意識を集中し始める。

「どこ？」イグニスは短く問う。

「いつものところ。まずアンカーを打ち込むから」猫科の獣を思わせる一ララのしなやかな身体が一瞬光ったかと思うと、「魔法風」がイグニスに向かって吹き付けてくる。

彼らがいるオムニシアから十数キロ離れた空に、光の輪が現れた。

「来て」そう言うが早いか、一ララの身体は消えた。結界の中に満たされた酸素と窒素の混合気体が真空を埋める。「ポン」という音がする。

「……ったく」イグニスも集中を始める。一ララが「アンカー」と呼ばれる探査魔法を打ち込んだ空間の景色が頭の中に浮かんでいる。茶褐色の、何も無い荒野。原始的な地衣類の痕跡しか発見されなかったこの惑星の、ありふれた光景である。だが、「アンカー」というマイルストーンがいまそこにある。イグニスはそのマイルストーンめがけて瞬間移動魔法をかければいいのだ。彼は念を凝らす。

ひゅん。

次の瞬間、淡い朱色の空にイグニスは浮かんでいた。

二つの太陽が輝いている。オムニシアの人々は、その二つの恒星にもまた、自分たちの惑星と同じように味気ない記号ではなく、それぞれに名前を付けていた。すなわ

ち、大きな太陽を「カプート（頭の意）」、小さな太陽を「カウダ（尾の意）」と。

この宇宙を統べる巨大な蛇「ウロボロス」にちなんで名付けられたものである。その名の意味するとおり、遠い未来、白色矮星になった「カプート」は、自分より小さな「カウダ」を呑み込むのだ。二つの連星は「チャンドラセカール限界」を超え、ひとつの中性子星となる。そうなったとき、オムニシアの人々はこの恒星系を離れていくだろう。レベルB以上の遮蔽魔法を展開し続けられれば、その場にいることは可能かもしれないが、意味のないことだった。

オレは、もつともつと早く、この惑星を離れるんだ。イグニスと思う。近接連星から容赦なく降り注ぐ強い紫外線を避けるために、イグニスは変身していた。彼の身体を覆っていた生きたスーツは、背中から飛び出してくる翼や、盛り上がる筋肉を避けるように形を変えている。

遠く地平線の手前に、巨大な紫色の半球が赤褐色の大地に埋もれているのが見えた。ラーラやイグニスの親たち、つまり、「デイープダイバー」が中継基地として作った街「オムニシア」だった。すでに数十世紀の歴史を持つ「均質化運動」に基づき、魔法結界で外気と遮断され「準地球環境」に整えられているという、典型的な辺境の街である。

もちろん「均質化運動」を良しとしない人々もいて、彼らはどの惑星のどの大気にも、いや、大気が無い惑星であっても、その環境に合わせて肉体を変化させて住んでいるのだ。その点、希薄とはいえず、窒素と二酸化炭素で構成される大気があるこの惑星は、変身するものにとって過ごしややすい星だと言えた。

——変身しているときのほうがいい。浮遊魔法で宙に浮いているにも関わらず背中
の翼で薄い大気を掻きながら、イグニスは思った。身体中に形容しがたい力がみなぎ
るような気がするのである。

「ぼーっとしてないで、はじめるよっ」先に変身して彼を待ち受けていたラーラが羽

ばたきながら言った。その言葉は魔法で増幅され、イグニスの鼓膜を揺らす。「ああ」イグニスは答えた。

いきなりラーラのつま先が彼の顔めがけて飛んでくる。数メートルの間合いを一瞬にして詰めてきたのだ。イグニスは魔法で身体をかわしながら同時にラーラの脇腹めがけて回し蹴りを放つ。ずんっ。ラーラはあえてイグニスの蹴りを受けたのだ。彼女の細い身体は地表の赤い岩に向かってはじき飛ばされる。

「え？」イグニスは思わず声を上げた。手応えがなかったのである。

地表にパツと砂ぼこりが舞い上がる。イグニスは目を凝らしてほこりの中にラーラを探した。

「どこを見てる？」背後からラーラの声が出た。イグニスは両手で上段を防御しつつ、振り向きざまに蹴りを放つ。しゅ。空を切る音。次の瞬間、イグニスの身体は地表に向かつてはじき飛ばされた。視界の隅に、宙に浮かんだまま両手を突き出しているラーラがいる。反撥魔法だ。イグニスは身体を丸め、背中をかばうように翼をたたむ。ばん。背中に張った遮蔽魔法が岩石と激突する音が出た。イグニスは素早く立ち上がり、降下してくるラーラにエレメンタル系の攻撃魔法を放つ。虹色に輝く光の帯が、翼を畳んだまま矢のように飛んでくる少女に向かって伸びた。

光の束はラーラの身体を包むように回り込み、蛇のようにうねった。ラーラが曲げているのだ。

「くそっ」イグニスは半球状の遮蔽魔法を張った。その瞬間、イグニスの目の前が金色ににじむ。遮蔽魔法同士が激突しているのだ。金色のうねりの向こうに、ラーラのとがった顔があった。男の子のような薄い唇は真横にきゅっと締まっていたが、かすかに端がゆがんでいるような気がした。

「わらってんじゃねーよっ」イグニスは怒鳴ると、両手を前に突き出し、遮蔽魔法の壁を前に押し出そうとして、ラーラの魔法と力比べのようなかたちになる。二人を隔

てる壁が、鏝迫り合いのようにぎりぎりとなわむ。

魔力は、ラーラの方が強い！

絶望に近い感情とともに、イグニスはこちらの中でそう叫ぶ。自分のすべての魔力を出し切っているつもりなのに、ラーラに押されているのだ。彼は重いものを押すように、体重を前につけて、歯を食いしばる。

わずかだが、動いた。ラーラの遮蔽魔法が、この惑星特有の赤茶けた岩場の上を、じりじりと動いていく感じがした。よし！ 押し返してやる！ イグニスは目を閉じて、さらに魔力を込める。

その瞬間だった。堅い壁のようなラーラの遮蔽魔法の抵抗が、フツと消えたのである。イグニスは自分の遮蔽魔法の壁とともに、つんのめるように前方に転がり出す。彼はあわてて遮蔽魔法を解除する。がんっ。がん。皮膚をさらに硬化させたつもりだが、間に合わなかった。砂ぼこりを上げながら、彼は数回転して地面に叩きつけられた。

「あはははははは」

ラーラの笑い声が聞こえる。全身の血が、ふつふつという音をたてて沸騰してゆくような気がした。「ちくしょう！」イグニスはなんとか体勢を立て直し、立ち上がる。自分の愚かさに腹を立てていた。

ラーラはすました顔をして、彼の正面に立っていた。イグニスは攻撃魔法のために両手の拳を握りしめ、集中する。

念を溜め、攻撃魔法を放とうとした瞬間、ラーラの姿が視界から消えた。瞬間移動魔法ではなかった。それらしき魔法風を感じなかったのだ。拡張した動体視力を超える速さで移動したのである。いや、そうではない。イグニスはこころの中にシミのように広がる敗北感とともに思う。

ラーラが早いんじゃないなくて、オレが絶望的に遅いんだ。絶対に引っかからぬように

気を付けていたつもりが、ラーラの遅延魔法の網にかかってしまったのである。魔法戦闘の基礎の基礎だった。

「くっ」

背後から両腕を締め上げられる痛み。思った通りだった。
「まいった」イグニスはいうめいた。

「二人とも、どこへ行ってたんだ！」

「ちよっと……その、『外』で……」イグニスは言いよどむ。授業以外での魔法戦闘は禁止されているのを思い出したのだ。

「――散歩してたんです」言葉に詰まったイグニスに代わってラーラは言う。

並んでいる生徒たちから冷やかしの声上がる。イグニスは唇を噛む。魔法戦闘でまたラーラに負けた、と言うよりは、もしかかもしれない。

「仲が良いのは結構だが、時間を守れ」教師のクヴィントスは低い声で言った。生徒たちから笑い声が漏れる。

「くそ」イグニスは小さな声で毒づいた。

「みんな整列して、そろそろ時間だ……」痩せたクヴィントスは静かに言う。

市議会をはじめとして、生徒たちや市民たちが見上げる中、谷間に差し込む近接連星の光がほぼ真上になった。南中高度である。薄い紫色の結界を通して、連星の光が谷に作られた街、オムニシアを照らしている。

――おそいじゃないか。イグニスがそうつぶやこうとした瞬間、空を巨大なものが覆い尽くした。彼は必死で飛び上がろうとする自分を抑える。

ぶん。一陣の風が真上から吹き付けてきた。巨大な物体が濃密な大気で充ち満ちた結界の内側に、一瞬で突入してきたらしい。その物体が空気を押しつけ、風を巻き起こしたのである。

「く」イグニスには彼のすぐ後ろに立っているラーラに聞かれぬように、小さく息を漏らす。記憶の一部が、恐怖とともによみがえる。そうだ、あれは――。

「五芒星だよ！ ものすごく大きな『ペンタグラム』だ！」イグニスを代弁するかのように、年下のアロンが興奮気味に叫ぶ。

アロンの興奮につられるかのように、幼い生徒たちは列を乱し、魅入られるように頭上に出現した巨大な球体を見上げて、口々に声を上げる。

十二地球年前のオレもあんなふうだったのか。イグニスは思う。

「イギー、これ、どこから見ても五芒星に見えるよ！」アロンが魔法で飛び、素早く球体を観察して言った。

アロンの言うとおりであった。その「図書館」は、金色と銀色の中間の色に輝く巨大なペンタグラムを、さらに大きな青く光る球体で包んだような形をしているのだ。そして、少し角度をずらして見ても、ペンタグラムの形は崩れなかった。

「アロン、やめないか。地上に降りろ！」クヴィントスの声が飛ぶ。

アロンはしぶしぶラーラの後ろに着地する。

歓迎のセレモニーが始まった。惑星を代表して市議会の面々が魔法で飛び、吸い込まれるように球体の中に入っていく。

待ち続ける間も、イグニスは緊張の極みにあった。何かが、こころの奥から、鎌首をもたげているような気がした。

よせよ、イグニス。オレは怖がっているのか？ 炎のような髪の毛の少年はは自問する。

セレモニーは終わり、移動図書館本来の業務が始まったのは十地球分もたってからだった。ペンタグラムを包み込む球体が生き物のようにふるんと震え、たくさんの人影をはき出したのである。それは、太古の地球、西暦でいうと十三〜四世紀、「中世」と呼ばれていた時代に存在した「徒弟」の格好をした少年たちだった。いや、少年の

姿をした電子精霊である。

「あれは、『ペイジ』たちだ。この惑星の『アーカイブ』にあるすべての書籍を、刷新してくれる」クヴィントスは少年たちに視線を向けると、そう言った。

少年の姿をした精霊たちは両手いっぱいの本を抱えて球体からふわりと降りると、オムシニアの中心にある木造の『アーカイブ』に向かって、ちよこまかと走って行くのだ。

「では、順番に『中』に入って……アロン？」クヴィントスはラーラの後ろに立っている少年に声をかける。

「は、はい」アロンは神妙な面持ちで、教師のそばに歩み寄った。下級生たちがクスクス笑いを上げる。

「アルファベット順だ」クヴィントスはそう言って、アロンを巨大な球体の真下に立たせた。「そのまままっすぐ上に行くんだ」教師は言った。アロンは素直に魔法で真上に上昇する。

アイツは昔のオレより上だ。イグニス Pentagonagram に向かって飛んでいく少年を見上げながら思った。

「……イグニス」

「う、うん」

気がつくのと、教師のクヴィントスが呼んでいて、自分がうなずいている。

「今度は——ちゃんと質問するんだぞ」教師はそう言って、イグニスの肩を叩く。

「いったい、オレは、四地球年のオレは何をやったんだろう？ そう思いながら、イグニスは真下から見てもきれいな五芒星に見える「図書館」に向かって昇っていく。

イグニスは球体の青い外角に触れる瞬間、魔法で吸い込まれた。いきなり、大小様々な光が、意志を持つかのように彼の周りを通り過ぎていく。遠く甘い記憶の欠片が、

彼の脳裏をくすぐっているような気がした。

思わず目を閉じる。オレは怖がってるんだ。イグニスには思った。魔法戦闘じゃララに叶わないが、それでもこの惑星の生徒の中じゃ二番目に強いのに。

廊下。

目を開けると、薄暗い廊下に立っていた。天井には丸いガラスに覆われた電球が光りを放っている。床はモザイクになっている。木で出来た床だった。オムニシアには存在しない、太古の地球の建築様式だった。白い漆喰の壁に、小さな油絵が掛けられている。

「……花の絵」

イグニスは顔を上げ、壁に掛けられた鮮やかなピンク色の花の絵を眺めながらつぶやく。

廊下は長く続いている。球体の内部だというのに、なんの勾配もない。

オレはどこに向かっているんだろう？ イグニスは考えた。むかし、この球体の内部に入ったことがあるのなら、なにがしか記憶があるはずだ、と思っていたが、なにも浮かばなかった。

果てしなく続くと思われた廊下の終わりに、ドアが見えた。木製の重々しいドアである。

イグニスは思わずドアの前で立ち止まった。ドアノブに手をかける。そのとき、古い地球の作法ではドアをノックすべきだったと思った。しかし、手が凍りついたように動かない。

「どうぞ」

ドア越しに女性の声が聞こえてきた。羽毛を思わせる柔らかな声だった。

あのむこうに、いるんだ。十二地球年前から、ずっと。
イグニスの頭の中にそんな言葉が響く。

なにをためらってるんだ、オレは。イグニスと鈍い金色のドアノブに手をかけて、ドアを開ける。

目に飛び込んできたのは、さほど広いとも言えない部屋の壁四面にしつらえられた本棚だった。本棚には、様々な背表紙の本が並んでいる。

正面の本棚からすっと視線を下げていく。目が合った。

一人の若い女性が、古びた木製のライティング・デスクに向かっている。その小さなデスクは入り口に突っ立っているイグニスから見て右側の壁に向かって置かれていた。彼女はデスクとおそろいの小さな椅子に腰掛けて、卵型の顔をイグニスに向けている。

彼女は、眼鏡をかけていた。古めかしい茶色のフレームが、ほとんど白に近い、淡い水色のエプロンドレスによく似合っている。

明るいブラウンの髪を毛糸のように丁寧に編み込んでいるが、白く形のいい耳の上から一筋の髪の毛が、カールして垂れていた。アクセントなのかもしれない。

柔らかげな唇は、淡いピンク色だった。かすかに開けて、白い前歯がのぞいている。戸惑ったように立ちすくむイグニスをみつめる茶色の瞳には、かすかな笑みが含まれていた。

「どうぞ、質問を」

その愛らしい声が、本だらけの薄暗い部屋に響いたとたん、イグニスのこころを、かぎ爪のような鋭い何かがわしづかみにした。妙に息苦しくなってきた、暑くもないのに額から汗が噴き出すのを感じた。目の前の女性は軽く首をかしげている。きれいだった。生まれてから、そんなにきれいな女性を見るのははじめてだった。

「……ここ、実際にある部屋じゃないよね」自分の声が部屋に響いたとき、イグニスは、オレの口はなにをつまらぬことをしゃべっているんだろう、と思った。

「ええ、あなたの脳の視床下部に与えられているヴィジョンにすぎません。こんなふうに実体の本を本棚に入れて運んでいたら、ちよつとした惑星ほどの大きさの移動図書館が必要です。……あなたの質問は、いまのよりよいのですか？」その女性は愛想よく言つて、まつたりとしたほほえみを浮かべた。

「ち、ちがうよ。質問じゃない。確認したんだ」イグニスに慌てて言った。「質問はいまからするよ」

その女性は細い人さし指を唇にあて、クスッと笑つた。「ええ、そういうことにしておきましょう……。そうそう、自己紹介がまだでしたね」彼女は椅子から立ち上がり、かるく会釈をする。

いくつくらいだろう？ 身長は同じくらいか、やや低いくらいだ。年格好は、十八、九地球歳といったところか。

「わたしはポリリュヒウムニア」彼女は明るい声で言った。「『ビブリオテカ・アレクサンドリーナ』の『ふみつかさ』です」

「オレは——ボクは、イグニス・ストラタス……学生」

「よろしくイグニス」ポリリュヒウムニアと名乗った女性はこつくりと頭を下げる。「こちらこそ、よろしく」

「で……ご質問は？ ……わたしにわかることならば、なんでもお答えいたします」彼女はそう言つて、まつすぐにイグニスを見つめた。

イグニスは唇をなめた。急に喉が渴いてきたのである。このひとが知らないことなんか、既知の宇宙にはない。イグニスは思った。目の前にいる女性は、人類が知る限りの膨大な知識が納められた、巨大なデータベースの化身なのだから。ほんとうは人間じゃない。可憐な女性に見えるだけなんだ。

そんなことはわかつている。クヴィントス先生にずいぶん前に習つたことだ。問題なのは、一月も前に考えた彼の「質問」がひどく幼稚で、ばかばかしく思えてきたこ

とだった。

「既知宇宙で最も賢い生物は？——人間はもちろん、地球種を除いて」

それがイグニスが用意していた質問だった。しかし、聞く前から答えはわかっている。イグニスの両親をはじめとする「ディープダイバー」の活動によって既知宇宙は爆発的に広がっているにも関わらず——数地球年前からその答えに変わりはないといわれている。

この恒星系からほぼ百五十光年ほど離れた星系の、ガス状惑星の第二衛星に奇跡的に生じた海に棲む、「アメフラシ」に似た軟体動物——それが、その問いの答えになるはずだった。

もちろん、移動図書館司書が最新の情報——たとえば人間をしのぐような高度な知的生命体がある、あるいはその痕跡が発見されたといったようなこと——を知っている可能性はある。だからイグニスはその質問を選んだのだ。

しかし、イグニスは、あり得ないと思っていた。この宇宙には、知的生命体は人間しかない。オヤジやおふくろはもちろん、オトナたちはみんなうすうすそう思っているんだ。

「どうかしましたか？」ポリュヒウムニアはうながすように声をかけてきた。彼女の唇が上下するたびに、イグニスの胸をイバラのトゲのようなものがぶすぶすと刺した。「いや、あの……」イグニスは目の前の女性が向けてくる無垢な視線から目をかばうように下を向いて口を開く。早く言えよイグニス、このひとはじれたそぶりを見せないけど、内心オレのことをのろまだと思っているかもしれないぞ！

イグニスは視線を落としたまま、言葉をつなぐ。ポリュヒウムニアが来ている淡い色のエプロンドレスの胸のあたりの女性らしい膨らみが、とてもまぶしかつた。

イグニスは顔を上げた。中性子をまき散らす星を、衛星軌道から凝視したような気がした。「あの……」イグニスは顔をしかめる。彼女は軽く首をかしげて、まるで子

犬のように彼の言葉を待っていた。

「……なんであんた、こんなことをやってるんだ？」イグニスはやく言った。

その質問を予想していたかのように、ポリュヒウムニアは満面の笑みを浮かべた。目が細まり、卵型の顔が、小さな女の子のようなあどけない表情になる。

「——『なぜ？』という問いは、この移動図書館が存在する理由ですか、それとも、わたしがここで働いている理由ですか？」ポリュヒウムニアはやさしく言う。

「前の方だ……です」イグニスは答える。目の前の人物は、どんなに本物の女性に見えるかが——電子精霊なんだ。だから、働いている理由なんてない。このために、この仕事のために作られたんだ。そんなことはわかってる。イグニスは頭の中で自分に言い聞かせるように繰り返す。

「そうですね……気取った言い方をすれば、『ロゴスで既知宇宙を満たすため』です」ポリュヒウムニアは言う。

「……気取った言い方、か」イグニスは思わず笑みを浮かべた。太古のメイドのような格好をしたポリュヒウムニアが、澄ました表情で言うのがなぜかおかしく思えたのである。

「初めて笑顔になりましたね。そのままリラックスしてください」彼女もイグニスにつられるように笑みを浮かべて言った。

「おたく……いや、あなたが言う『ロゴス』ってのは、言葉っていうより、言葉を組み合わせてできる知識、っていう意味だろ？ 知識を宇宙に配ってるってことだろ。だから、なぜ？」

「……『ロゴス無き魔法はパトスに支配される』ポリュヒウムニアは暗唱するように言った。「——あるお方の言葉です。ディープダイバーと呼ばれる魔法使いたちが、過酷な環境の惑星や衛星に、このオムニシアのような街を築いて既知宇宙をどんどん広げていき、わたしたち『ふみつかさ』がそこから得られた知識を宇宙に散らばった

人類に広めていく。知識というものは、共有されなければなんの価値もありません」
「だから、なんでさ？」イグニスと言う。

ポリュヒウムニアはライティングデスクの上に置いてあった羽ペンを手でもてあそんだ。その仕草は、ポリュヒウムニアの細い指に、とても似合っていた。

「増大してゆくエントロピーに食いつくされないためです。もし、宇宙という広がり
を認識できる——今のところ唯一の——知的生命である人類が、環境から学ぶことを
やめてしまったら、そこで宇宙の終わりが始まりです。だから、人間は既知宇宙を
広げ、学び続けなければならぬんです」ポリュヒウムニアはそう言つて、言葉を句
切り、茶色の大きな瞳で、まっすぐにイグニスを見つめた。イグニスはさらに質問を
発しようとしたが、胸をわしづかみにしている何かが、暗く力の強い何かが、それを
押しとどめようとしているのを感じた。

「な」イグニスはようやく声を出した。「なんで、宇宙は、なんのために……」イグ
ニスはそこで続く言葉を飲み込む。ポリュヒウムニアが右手のひとさし指を軽く立て
ているからだつた。

「質問はひとつだけです。イグニス・ストラタス」

「うん」イグニスは素直にうなづく。彼は名残惜しげにその太古の書齋を模した部屋
の中を見渡す。

「……『ふみつかさ』にもう一つ質問をしたければ、十二地球年後にまたここに来な
くちやいけないってことか」イグニスは壁に並ぶ本棚をぼんやりと見ながらつぶやく
ように言つた。

「そうですね。——もし、本をお探しなら『アーカイブ』にいるページにいくらでも
言つてくださればいいのですよ。だいじょうぶ。……あなたなら、きっと、自分で答
えを見つけることができますよ」ポリュヒウムニアはにこやかにそう言つた。

その表情を見てみると、イグニスの頭の中にある言葉が浮かんできた。

「ごめん、質問はひとつだけって、わかってる。——でも、どうしても確認したいことがあるんだ。いま『あなたなら』って言ったよな？ もしかして——」イグニスと言った。ポリュヒウムニアが応えようとする前にイグニスは言葉をつなぐ。

「十二地球年前にもあんた、ここに、オムニシアに来たんذار？ オレ、とっても小さかったと思うけど、そのとき、オレ、この部屋に入ったかどうか、知りたいんだ」

「イグニス……」

「うなずいてくれるだけでいいんだよ！ 十二地球年後、オレはこの惑星にはいないから」イグニスは言った。

「そうなのですか？」

「そうだよ。もちろん。オレは、成人したら、親と同じようにディープダイバーになるんだ。だから、つぎ、いつ会えるかわからないから。いや、もう一生会えないかもしれないから——」

そのとき、イグニスの背後のドアを誰かがノックした。

「うなずくだけでもいいんだ」

イグニスはポリュヒウムニアに近づこうとした。そのとき、イグニスの肩を大人の手が掴んだ。振り返るまでもない。イグニスは思った。クヴィントス先生だ。

「なにをやってる。イグニス」

「いや、先生、あの」

「いいから、もう出るんだ」

イグニスは教師のクヴィントスにドアに向かって追いついて立たされた。彼は首をねじ曲げて、ポリュヒウムニアを見ていたが、彼女はうなずかなかった。

ドアが閉じられる寸前、「イグニス」ポリュヒウムニアは口を開く。イグニスは外に押し出そうとする教師に抗って足を踏ん張った。

「……最後の問いは、あなた自身の手によって、答えを見つけてください」ポリュヒ

ユムニアは言った。

「なにやってたんだよ！」

クヴィントスにつまみ出されるようにして、五芒星を囲む巨大な球体から降りて来たイグニスに、ラーラ・ポムンが駆け寄って声をかけた。

イグニスは幼なじみに視線を向ける。ラーラの身体は、細くしなやかな針がねのようだった。鮮やかなオレンジ色の髪に褐色の肌を包むグリーンのバイオスーツ。

イグニスは、自分がラーラとポリュヒウムニアを比べていることに気がついた。同じ女性なのに、まったくちがう。

「答えなさいよ」ラーラはイグニスが黙っているので、じれたように言った。

「なんでもない。さあ、次の質問者はだれた？」クヴィントスは生徒の列に声をかける。

ひとりの下級生が手を挙げて、球体の中に入っていく。

イグニスは黙って歩き始めた。

「どこに行くの？」ラーラの声が背中に投げかけられる。

「家に帰るんだ」イグニスは短く答えた。

一地球日の半分にも満たないこの惑星の昼が終わり、冷たい夜が訪れようとしていた。イグニスは自分の部屋の、すべすべした天井をぼんやりと眺めていた。目を閉じることができなかった。目を閉じたとき、淡い色のエプロンドレスを着た女性のことを考えてしまうのである。彼女の髪、肌、瞳、胸、体つき。すべてが優美で、女らしかった。

「真珠の耳飾りの少女」に似ている。

ふいに、そう思った。なにかに似ているという感じが、ずっとこの奥に挟まっ

ていたのだ。そうだ。あのひとは、太古の画家「フェルメール」の描いた、名もない女性に似ている。

イグニスはおムニシアの「アーカイブ」で美術の時間中に観た絵画を頭の中に描いてみる。無地の暗い背景に、やや顔を横に向け、つぶらな瞳でこちらを見ている女性。かすかに開けられた唇はしつとりと濡れている。

ポリュヒウムニアはあの絵画の少女よりも、きれいだ。そうだ。きれいなんだ。見つめていると痛くてたまらないほどきれいなんだ。

彼の脳裏の半分くらいをポリュヒウムニアの姿が占めていた。胸がむかむかした。怒りと呼んでもいいような、鬱屈した感情が、腹の底でくすぶっているような気がする。オレはどうしちまったんだろう？ 天井を眺めながら、イグニスは考えた。目を閉じることができない。

目を閉じれば、あの絵のような、女性らしい緩やかなカーブを描いたポリュヒウムニアの頬が浮かぶのである。

イグニスは身体を起こす。

居間の方から低い声が聞こえてきた。女性でも男性でもない、中性的な、非人間的な声である。彼はすべすべした花崗岩の廊下を歩く。

イグニスの家は、この惑星唯一の街オムニシアを囲むようにしてそびえ立つ崖に魔法によってくりぬかれた洞窟であった——貧しいわけではない。来訪歴五世紀頃から人類は貧困を完全に駆逐していた——典型的なデーパーダイバーの辺境の住まいである。

「まるでリンゴに巣くった虫のような生活」と、住民たちに自嘲気味に形容されるように、多角形の部屋を丸く細長い通路で結んだようなつくりになっている。

イグニスは部屋の中でもっとも大きな居間のドアの前に立つ。ドアの上に灯っていた光を放つ精霊ウィルオーウイスプがイグニスを認識し、ぶるぶると震えながらド

アを開ける。

居間の暗がりにおびただしい星々が浮かんでいた。イグニスには思わず入り口でたじろぐ。

六角形の居間いっぱいには航宙図が投影されているのだ。星の密度からいくと、すくなくとも数十光年の広がりを持つようだった。星図のイメージの中心に、人の形をした精霊が立っていた。濃い青緑色の肌に、ほの白く光を放つ顔。デイープダイバーたちが通信に使う「エリー」という名の精霊だった。きつと、父さんのことを報告に来たんだ、とイグニスは思った。

その精霊はドアのところ立っているイグニスに気がつくのと、軽くあごを引いた。人間に似て人間ではない顔である。そうだ。あのひとも、このエリーと同じ「機械の中の幽霊」なんだ。イグニスは、そう思おうとした。しかし、頭の中に巣くっている太古の女性の姿と、目の前の精霊とはあまりに容姿が違いすぎた。

「起きてたの？」居間の隅に立っていたイグニスの母親が声をかけた。どことなくイグニスに似て鋭く引き締まった感じのする女性。オレンジ色の髪を短くクルーカットにしている。

「オヤジはどこ？」イグニスは言った。

居間の中に展開された、映像による宇宙の立体模型の中心からかなり離れた位置に、黄色い矢印が浮かぶ。精霊のエリーが気を利かせて表示したのだ。

「そこ」母は言った。「……このオムニシアから百二十五光年先よ」

「ふうん」イグニスはあいまいにうなずく。途方も無い距離だった。しかし、実感がわかない。

「その近くにある超新星を迂回しながらダイブしてるの。だか時間がかかる」母親はそう言った。

イグニスは、旅立って二年近くになろうとしている父のことを考える。

がっしりとした体型の父は、ディープダイバーの仲間たちとともに、広大で危険な宇宙空間を移動しているのだ。

それは「ダイバー」というよりも、「クライマー」に近い感じだった。暗く冷たい宇宙空間の中、それこそ一歩づつ、瞬間移動魔法で距離を詰めていくのである。彼らのピッケルは、「占い」だった。目的地から届く光、つまり視覚による情報はすべて「過去」のものなのである。彼らはその光を読む。そして、一瞬後の自分の安全が読めたとき——目を閉じて、深淵に飛び込むのである。

うかつなダイバーが超重力場の真ん中に瞬間移動してしまい、逃げるまもなく素粒子以下に分解されたという事故は、枚挙にいとまがない。ダイバーたちにとっては、瞬間移動先の座標こそが生死の境目なのである。

瞬間移動後は、ディープダイバーたちの魔力により居住できそうな惑星ないし衛星に着陸する。そして、街作りが始まるのだ。街作りとはすなわち、こころの中にマイルストーンを作ることだった。一般的な魔法使いは、精神的な道標から道標に向けて、もしか確実に瞬間移動魔法をかけることができない。イグニスは、幼いころから父にそう教わってきたのである。

「行きは何年もかかるし、過酷な惑星に居留地を作って、しばらく過ごさなければならぬ。でも、帰りは一瞬だ。おまえが瞬きする間に、俺はこのオムニシアに帰ってくる」一昨年、出発の朝、父は母とイグニスにそう言ったのである。

「父さんがいまいるところって、どんなところ？」イグニスは精霊のエリーに訊いてみた。

精霊は薄暗い居間の中心で顔を輝かせる。目を閉じて集中しているかのようだった。「比較的若い恒星の第二惑星に着陸しています。結界を張りキャンブ中。数ヶ月間その恒星系を探查しています。生命の痕跡はないようです……」精霊は、ロウソクが揺らめくような声で、暗唱するかのように言った。

その精霊の口調は、どこか不思議な感じがした。イグニスはず「そこから飛んで来たんじゃないの？」と精霊に訊いてみる。

「いいえ」精霊は即座に首を振る。「百二十五光年の距離を『同時』に通信することはできないのです」

「だったら、どうやって？」

「査読魔法よ。わたしの魔力を通して父さんの『現在』を読んでいるだけ。いちばん時間を過ごしていた居間で。……精霊は光速を超えることができないから、恒星間通信には向かないわ。忘れたの？」母は言った。

イグニスは思い出した。瞬間移動魔法だけが光年単位の巨大な距離を瞬時に飛び超えることができるのだ。それ以外のあらゆるものは——たとえ精霊であっても——光速の速度に縛られている。だから、瞬間移動魔法を使って魔法使い自身が伝令をつとめない限り、光速を越えて情報を伝えることは——。

「どうしたの、イギー？」

「母さん、いま、移動図書館が来てるだろ？」

「え、ええ」母親の顔に困惑の色が浮かんだのをイグニスは見逃さなかった。「あの球体の図書館も、『ふみつかさ』も、光速を超えることができないのなら、どうやってこんな辺境の惑星にまで本を運んでいるんだよ？」

「それは『バックドア』のおかげです」母に代わって精霊のエリーが言った。

「バックドア？」

イグニスの問いかけに精霊は、居間いちめんの宇宙図に無数の赤い点を浮かび上がらせた。

「主要な恒星系のラグランジュ点に、魔法によって空間同士が接合された一種の『回廊』が置かれています。宇宙という表舞台のバックドアのように。精霊たちは相対時間を調整しつつそのドアを通して、各恒星系に出現するのです」精霊は言った。

「すると、あの移動図書館も、そのバックドアを通過して来たってこと？」

「そうです。ただし、この恒星系は近接連星ですので、いちばん近いバックドアは、五光年離れたもつと安定した恒星系に置かれています」精霊は答えた。

「と、いうわけよ……。ところで、『ふみつかさ』にどんなことを訊いたの？」母はイグニスを見つめて言った。

「いや、その、『なんでこんなことやってるんだ？』って」

「イギー」母は苦笑する。「既知宇宙がこれだけ広がったら——」

「わかっているよ。もちろん」イグニスは大きくうなずいてみせる。

「ならいいけど……もう寝なさい。あしたも学校でしよう？」

「ああ」母の視線に含まれる不安の影に気がつきながら、イグニスは部屋に戻った。

眠れなかった。

ある考えが頭の中を占領しているのである。あの電子精霊は、最寄りの「バックドア」とは五光年離れていると言った。つまり、あの巨大な五芒星を包んだ球体は、光と同じ速度で飛んだとしても、オムニシアまで最低五年はかかる、ということなのだ。

往復で十年。イグニスは闇の中で自嘲気味に笑みを浮かべる。あのひとは——ポリュヒウムニアは、「光子（フォトン）」と同じだ。光と同じ速度で移動している間は、時間が停止する。彼女以外のあらゆるものは、それぞれの場所の時空のゆがみと速度に応じた相対時間に沿って、否応なく年を取っていく。

彼女からすればきつと、四地球年のガキだったオレは、あつという間に十六地球年の生意気なガキになってしまったのだろう。次に会うとき、彼女の時間では一瞬かもしれないが、オレは百二十、百八十のジジイになっているのかもしれない。

目を閉じる。丸く、愛らしい彼女の顔の輪郭が浮かぶ。でも、オレは。

ふたたび、闇の中で身体を起こす。

裸足で家の中の歩く。母は眠っているようだった。イグニス、そつと家を出る。オムニシアは短い夜に包まれていた。惑星に生物時間を合わせている住民たちはみな眠っていた。ひとり図書館司書のことを考えて眠れない少年を除いては。

イグニスは谷に作られた細長いオムニシアの街を中心の広場に向かって飛んでいた。その狭い世界と、変身しなければ一瞬で肺が凍りつき紫外線で焼かれる過酷な世界の外がイグニスの世界のすべてだった。

各住居の入り口に灯されたウィルオーウイスプが、「アーカイク」で調べた古代の地球の大都市に並ぶ街灯のように見える。

しかしイグニスは、ほんとうの地球を知らない。行ったこともないし、さして行きたいとは思わなかった。仮にいますぐ瞬間移動魔法で行ったとしても、べつ甲ぶちの眼鏡に木綿のエプロンを着け、ライティングデスクに向かうような女性がいるはずもない。

「現在」の地球は、陸地のほとんどが数百メートルもの高さの魔法木の森に覆われた聖地だった。「ル・ボア」と簡潔に呼ばれるその巨大な森で、既知宇宙から集められた選りすぐりの魔法使いたちが研鑽を積んでいるという。

魔法学に興味がなく、ただ父や母のように「デーパーダイバー」になりたいだけのイグニスにとっては、まったく縁のない惑星だった。人類発祥の地といっても、それだけのことだった。でも、ポリュヒウムニアは、あの惑星で生まれたんだ。イグニスは五芒星を包んだ球体を遠く見つめながら、そう思う。

辺境の惑星において、「アレクサンドリア図書館」は、ほとんど「神話」だった。『来訪』後の出来事なのに、九人の「ふみつかさ」の復活は、本来のギリシャ神話の「ムーサイ」と混じり合っていくような気がした。

思いにふけりながらイグニスが近づくにつれ、その球体は、次第に大きくなっていく。その姿は、さらにイグニスのところを掻き回した。

あえて広場へと降り立つ。見上げてみたかったのである。その球体を。球体の後ろには外界と街とを分かち結界があるはずだったが、この惑星の夜の暗闇のせいで見えなかった。イグニスは自分の目を変化させ、可視光線波長を拡張してみる。結界が遮断しているために、有害な宇宙線は入ってきてはいない。あたりまえのことだった。黒をバックにして、視界いっぱい五芒星が広がっていた。それは、隠された知恵を表すシンボルである。その凶形を包み込むように球体が鈍い青に光っていた。

夜だというのに古代の小姓を模した「ペイジ」と呼ばれる精霊たちは働いていた。「アーカイブ」へ、電子データ以外に、参考として紙で造られた本、つまり実物の本を運んでいるのである。魔法により造られた生ける「アーカイブ」は本を縮小し、自分の内部に納めるのだ。

彼らペイジは地球時間を元に、この惑星の夜でも働いているのだろうか。そう思ってから、精霊は眠る必要がないということに気がついた。

イグニスは意を決して球体の真下から上昇する。昼間入ったあたりに到達したが、なにも起きなかった。そっと球体に触れてみる。抵抗もなくイグニスの手は球体の内部に入っていく。まるで色のついた水に突っ込んだように手が青く染まる。目を凝らしてみると、小さな白い火花のようなものがちりちりと光っていた。

イグニスは大きく息を吸い込むと、一気に変身する。皮膚は硬質化し放射線をはじくために光沢のある被膜で覆われた。全く酸素が無くても一時間以上生存できるよう、体内の代謝プロセスも変化させた。

ほんの一瞬ためらったあと、イグニスは球体の中に飛び込む。周りが一瞬にして青く染まった。真正面に白金色の五芒星が見える。球体に包まれていた五芒星の巨大さに圧倒された。

前へ進もうとする。進めない。飛行魔法をかけているつもりなのに、球体を構成する青い液体のような物質は魔法に反応しない。液体ならば泳げるはずだ。イグニス「アーカイブ」で見た水泳選手のように両手を大きく広げ青い液体を掻く。原始的だがしかたがない。あの五芒星のどこかに、ポリュヒウムニアが、オレに答えをくれるあのひとがいるんだ。

イグニスの身体を何か後ろから引っ張っていた。「くそっ」イグニスは振り返った。球体を満たす青い液体のようなものの中に、小さな光の塊がいくつも生まれている。そしてそれは、イグニスの足にまとわりつき、彼を球体から引っ張り出そうとしているかのようだった。

彼は文字通りリングゴに巣くう虫のように引っ張り出された。彼を引っ張り出したのは「ペイジ」と呼ばれる精霊たちだった。

「惑星時間の夜に移動図書館に立ち入ることは禁じられています」球体の外に出て、古代の子供の姿になったペイジたちは、口をそろえてそうイグニスに言う。

「ポリュヒウムニアはどこだ！」イグニスは彼らの小さな手をふりほだきながら叫んだ。

「『ふみつかさ』ならいらっしやいません。いまお出かけになっておられます」ひとりのペイジが答えた。

「なんだった？」

イグニスは希薄な夜の大气の中で、コウモリのような翼をはためかせていた。あと一地球時間あまりでこの惑星の夜が明け、「カプート」と「カウダ」と呼ばれる二つの太陽が、南東の地平線から昇ってくる。

イグニスは、この惑星の北の極を目指していた。

北に向かうにつれて、空の色は紫がかった青から暗い群青色に染まっていく。そし

て、草木一本もない荒涼とした大地も、褐色から灰色に色を変えていった。気温はおそらく摂氏マイナス七十度から八十度の間だろう。

遠くに白いものが見える。この惑星に存在するわずかな水分が、霜になっているのだ。イグニスには飛行魔法の速度を上げた。あの白い霜の冠に、ポリュヒウムニアがいるような気がしてならないのである。なぜそう思えるのか、イグニスにはわからない。だが、霜の上にひっそりとたたずむポリュヒウムニアの姿が、なぜか頭の中に焼き付いて離れないのである。予知夢なのか、あるいは存在しない記憶なのか、わからなかった。とにかく、イグニスはがむしやらに極を目指した。

冷たい鉄の色をした崖の淵にうつすらとかかった白い霜。その上に、淡い水色のエプロンドレス姿を見つけたとき、イグニスはあるべきものがそこにある、という、ふしぎな感覚を抱いた。

彼女は、雪原に降り立った美しい鳥のようだった。イグニスの心臓が飛び跳ねた。「ポリュ——」声を発して近づこうとしたイグニスは、その言葉を呑み込む。

ポリュヒウムニアは独りではなかったのである。白っぽい崖の淵に、もう一人の人物が立っていた。ポリュヒウムニアに背を向けて立っているようである。小柄な人物だった。やせた少年のようにも見える。イグニスはなぜかそつと地表に降り、目を凝らした。つまり、可視光線の波長を変え、いろんな「角度」からその人物を観察したのである。

ポリュヒウムニアとその人物が、数十メートル離れた岩場にいるイグニスに気がついたようすはない。イグニスは灰色と白のまだら模様の冷たい地面に這いつくばるようにして、二人の様子を観察した。

ポリュヒウムニアは、背を向けている人物に話かけているかのようになり、ときおり首を上下させている。彼女が話しかけている小柄な人物は、黒っぽい服を着ていた。まばらな星がひっそりと光を放つ暗い空を背景に立っていたから、オレは最初、気がつ

かなかつたんだ。イグニスがそう思ったときに、一陣の風が吹き希薄な大気をかき混ぜる。空気中に舞う霜が、その人物の頭にあたり、黒い髪をなびかせた。霜は白く、暗い空に引かれた一本の線のように長く伸びていった。

ポリュヒウムニアは、ゆっくりと手を挙げて、手ぶりを交えて、その男に言葉をかけた。男は振り返った。

イグニスは息を呑んだ。

「あれ」はいったいななんだ？ イグニスは目を細める。その男の顔は真っ黒だった。顔というよりも、皮膚や頭蓋骨の代わりに、漆黒の闇が封じ込まれているような感じだった。

ポリュヒウムニアがその男に向かって軽く手をさしのべるのが見えた。いかにも女性気が許した男に対してみせる仕草のようである。イグニスの胸を、ドラゴンのような生き物が驚づかみにしたようだった。その鋭い爪は、イグニスの硬化した皮膚を突き破り、肋骨を打ち砕き、ぴくぴくと動いている心臓を引きずり出す。おまけに、その人物は、ポリュヒウムニアがさしのべた手にほんの一瞬軽く触れた。イグニスは顔をしかめた。まるで自分の心臓にも触れられたかのように。

ポリュヒウムニアが頭を大きく上下させた。その男に何ごとか大切なことを言い聞かせるかのようにだった。

男はふたたびポリュヒウムニアに背を向けて、白い崖の向こうに広がる暗い空を見上げるような仕草をした。ふたたび風がふき、わずかな水分を巻き上げ、白い糸のように何本も伸びていった。男は、どこかへ散歩に出かけるように、崖の先の何もない空間に向かって踏み出した。

「あ」イグニスは思わず声を上げる。男の身体が一瞬にして崖の下に向かって吸い込まれるように消えていったからだだった。イグニスは思わず翼を大きく広げ男が墜ちたあたりに向かって飛ぶ。

イグニス は空中で静止して、男が墜ちていった崖の下の暗がりを目をこらす。赤外線波長で見ても、あの人物が放っている熱は確認できない。

「……だいじょうぶですよ、イグニス」

のんびりとしたポリュヒウムニアの声が背後から聞こえてきた。

「……なんだ、アイツは？」イグニスは振り向きざまにポリュヒウムニアに言った。

「『ほかの誰でもないおかた』、です。この宇宙でただひとりの人物——」ポリュヒウムニアは、イグニスから視線を逸らして、言った。

「ひよつとして……伝説の……」イグニスの頭の中を、幼いころから聞かされてきた、闇の王と呼ばれる神話的な存在にまつわる物語の数々が駆け巡る。

「そうかもしれません」

ポリュヒウムニアは顔をイグニスに向けて、いたずらっぽくほほえむ。希薄な大気に超低温にもかかわらず、彼女はなんの変身もしていない。白く柔らかな肌につややかな髪。淡いブルーのエプロンドレスの裾が、ゆっくりと風になびいていた。白い靴下におろしたてのような黒い靴が、凍りついた岩をそつと踏みつけている。

それは、目の前の女らしい女性が、人間ではないあかしだった。それなのに、イグニスは、彼女の表情に含まれる感情に嫉妬していた。遠くからでも、はっきりとわかった。ポリュヒウムニアが、あの伝説の人物に強い好意をいだいているのが。

ひりひりと燃えるような想いが、イグニスの胸を焼く。その想いはイグニスの胸を突き破り、肩を伝わって両手に満ちた。彼は素早くその美しい「ふみつかさ」に歩み寄ると、燃え上がる両手で彼女を抱きしめた。

「イグニス？」

腕の中からポリュヒウムニアの声がする。その声に混じるとまどいの色が、イグニスのたける気持ちをつけた。彼はさらにつよくポリュヒウムニアを抱きしめる。言葉をかけようと思うのだが、声にならなかった。超低温に耐えるために皮膚感覚

を鈍くしていたために、じぶんの腕のなかのポリリウムニアは、まるでそこにいないかのようだった。いや、もともと、いないのだ。腕の中の女性は、存在しないのだ。

「ポ、ポリリウムニア」しかし、イグニスはうめくように声を上げ、存在しないはずの女性をより強く抱きしめた。

「……はなしてください」ポリリウムニアのおちついた声がイグニスの胸に響く。「いやだ」イグニスは即座に答える。

極から見る地平線の向こうの空が、暗い青から徐々に赤みがかった紫色に変わっていく。カプートとカウダ、二つの太陽が、さびしい辺境の街オムニシアをかすかに照らし始める時刻なのである。

ポリリウムニアの髪が、暗がりではゆるる蜘蛛の糸のような霜を含んだ風に、そつとなびいた。

「……三億八千七百四十二万四百八十九」ポリリウムニアは、とつぜん言った。

「……なんだよ、それ」

「九の九乗——わたしは電子の世界からやってきた精霊です。何枚ものパンケーキを作るように必要に応じて複製され、無数の『バックドア』を通して宇宙に蒔かれています。わたしは、その中のたったひとつの芥子の種。さっきの数字は——」そう言いながらポリリウムニアは意外に強い力でイグニスの腕をふりほどく。さっきの数字は「この宇宙に存在する『ポリリウムニアたち』の——」

「だまれ」イグニスは短く言った。「——だまっててくれよ」

ポリリウムニアはすなおに従った。イグニスはポリリウムニアの両腕を掴むと、口を開いた。彼は、ポリリウムニアの茶色の瞳を見つめる。その瞬間、彼は、目の前の精霊に対して言うべき言葉がなにも無いことに気がついた。

この宇宙に、ポリリウムニアという女なんか存在しないのに。その代わりに、機

械の中で造られた三億もの影があるだけなんだ。どんな言葉を口にしたとしても、それは、壁に描かれた落書きに向かって独りで叫んでいるようなものなのだ。

「……離してください。イグニス」ポリュヒウムニアは静かに言った。

彼女の腕を掴んでいたイグニスは、そっと手を離れた。彼女が着ているエプロンドレスのスリーブに、彼の手がつけた皺がついている。何度見ても、ポリュヒウムニアは、物理的に存在するようだった。

「アイツとここをなにしていたんだ」イグニスは言った。口に出してみると、その言葉は、ひどく愚かしいように思えた。自分がちっぽけな毛虫になったような気がした。

「ときおり——」ポリュヒウムニアはかすかな笑みを含んだ唇で、言葉をつむぐ。「あの方は、わたしたちの前で、あんなふうにするまわれるのです」

「答えになつてないよ」イグニスは抗議した。「アイツは神さまなんだろ？　なんで、あんなふうに、そのへんのいじけた子供みたいにふるまうんだ」

「それは……」

ポリュヒウムニアは、ためらうように視線を逸らす。その仕草は、古代の演劇やフィルムに刻まれた一つの女性像そのものに見えた。突然、イグニスは激しい喉の渴きを覚えた。代謝プロセスを変質させているにもかかわらず、彼の喉はからからに渴いていた。

「とても孤独なおかただから……この宇宙で、いちばん孤独な——」

「オレだって、孤独だ」イグニスはポリュヒウムニアの言葉を乱暴にさえぎった。「オレだってひとりぼっちだ」イグニスは両親や学校の仲間や、クヴィントス先生をはじめとするオムニシアの人々のことを思い浮かべながら言った。

「あなたは孤独じゃない。わかっているでしょう？」

予想していたとおりの答えだった。

「でも、いつか、孤独になる」イグニスと言う。いじけた子供みたいにふるまっているのは、このオレだ、こころの中で、もう一人の自分がなじっていた。

「——なあ、アイツを愛しているのか？」焼け付くような渇きの命ずるまま、イグニスは声を発した。

ポリュヒウムニアはおどろいたように顔を上げ、イグニスと視線を合わせた。超低温の極北の大气の中で、彼女の瞳は春の日差しのように輝いていた。

「はい」ポリュヒウムニアはこっくりとうなずいた。

「伝説によれば、アイツは宇宙を破壊できるそうじゃないか」イグニスは突っかかるように言う。

「そうです。あのお方がその気になれば、魔法によって全宇宙を消し去り、次の瞬間、再び召喚することができます。伝説ではありません」

「ばかばかしい」イグニスは吐き捨てるように言う。喉の渇きは、暗い怒りに変わっていた。「だから、愛してるのか。すごい力を持っていて、アンタを造ったからか？」

「九人の——九タイプ、『ふみつかさ』を造ったのは、あのお方ではありません。八千年あまり前に、地球のアレクサンドリアという都に集まった科学者たちの手によって——」

「そんなこと知ってるよ」

イグニスはポリュヒウムニアに背を向ける。うなじのあたりにポリュヒウムニアの視線を感じた。それは、優しい日差しのような視線だった。でも、太陽の光と同じように、独り占めできない視線なんだ。

「わたしは、帰ります」ポリュヒウムニアの声が響いた。「この土地の言葉で、カプトとカウダが南中高度に達したときに、この惑星を離れなければならぬから」イグニスは答えなかった。

「……イグニス・ストラタス」ポリュヒウムニアは静かに言った。「……ラテン語で

『重なり合う炎』。あなたらしい名前だと思います。……いつか、あなたは、深淵の向こうに、『答え』を見つけてるでしょう」

「え？」イグニス は振り返る。

「この宇宙がなんであるか。なんのために自分がこの宇宙に生を受けたのか、を」「見つけて、なんになるんだ？ オレはアイツやあんたみたいに永遠じゃない。死ぬんだ。この宇宙から消えてなくなるんだ！」

「ええ、そうです。モーター——『限りある者』よ。……でも、限りある者こそが、この宇宙を宇宙たらしめているのです」

イグニスがその言葉に応えようとした瞬間、ポリュヒウムニアは一筋の光となって、南の空に向かって伸びていった。彼女の立っていたあたりに降り積もっていた霜が風に吹かれて舞った。

イグニスは凍りついた大地の上に座り込み、膝を抱えている。

肉体が酸素を欲していた。このままじっと座り続けていけば、オレは死ぬだろう。いや、オレが死ぬんじゃない。何兆もの細胞が壊死するんだ。細胞という生物装置の中に宿った「オレ」という幽霊は、消えてしまうんだ。宇宙が生まれて以来、消えていった無数の幽霊たちと同じように。

南の空に、二つの太陽が昇り始めている。そして、その近接連星はオムニシアの上空に達するのだ。そのとき、あの巨大な球体は、この惑星を去る。五光年離れた「バツクドア」に向けて。そして十二地球年後、再びこの惑星を訪れる。その繰り返し。

いや、それもいつか終わるときがくるんだ。イグニスは思った。

大きな太陽カプートは、小さな太陽カウダを呑み込むのである。ちょうどウロボロスの蛇が、じぶんの尾を咥えるように。そして、毒舌を振りまくコメディアンよろしく危険な中性子をそこらあたりにはらまく星となるのだ。オムニシアは、たき火の上

であぶられる豚の丸焼きのように、中性子によって焼かれるだろう。

宇宙だって、いつか死ぬ。陽子崩壊によって、きれいさっぱり、塵ひとつ残らない。そのとき、この宇宙が死ぬとき、ポリュヒウムニアは、どうしているんだろう。

イグニス は両膝に頭を埋めた。

「こんなところでなにをやってるの！」ラーラ・ポムンの声が、イグニスを揺り起こした。

「あ……？」イグニスは目を開ける。彼は、凍てついた岩盤の上に座っていた。空は明るい紫色になっている。目の前に、ラーラが立っていた。彼女の皮膚は、アンドロイドを思わせる鈍い銀色に変化している。

「ほら、立って！ 代謝レベルを上げなさい」ラーラはイグニスの腋のあたりから両手を差し込んで、彼を立たせた。

イグニスはよろめきながら、一二歩前に歩き出す。

「オムニシアまで瞬間移動できる？」ラーラはイグニスの顔をのぞきこみながら言う。

「……移動図書館はどうしたんだ？」イグニスは苦しげに声を上げた。

「もうすぐ帰っていくわ。あと数惑星分ってとこ。それより、オムニシアまで帰れるの？」

「だいじょうぶだ。……ほつといてくれ」

「ほ、ほつとけて！ そんな言い方しないでよ。せっかく探してあげたのに」

「それには、札を言うよ。独りで帰れるから、先に帰ってくれ」

「なによ、人が心配して、前みたいになるんじゃないか、って思っ——」ラーラは気色ばむ。

「……『前みたいに？』」イグニスはラーラの言葉をさえぎった。

「いえ、あの」

「知ってるんだろ？」

「……あなたは、四地球歳のあなたは、移動図書館の中で『爆発』したのよ」ラーラは言った。

「ば、爆発ってなんだ？」イグニスには面食らった。

「四地球歳の魔法使いではあり得ないような強いエレメンタル魔法を、あの司書の部屋で放出したのよ。数兆という書籍のデータと、圧縮された数億の本、そして、『ふみつかさ』を吹き飛ばした」

「なんだって？ どうして、そんな」イグニスは首を振る。

「それは、自分で——いえ、あなたにはその記憶は無いはずだわ。消されたから」
「クヴィントス先生だな？」

ラーラは答えずに、かすかにうなずいた。彼女は惑星の赤道に顔を向けている。

「もうすぐだ」イグニスは低い声でそうつぶやくと、いきなり瞬間移動魔法をかける。
ひゅん。イグニスの身体が消えた。

次の瞬間、イグニスは紫色の結界に覆われたオムニシアの上空にいた。天の中心に、燃えさかるウロボロスの蛇の頭と尾があった。その二つの太陽から降り注ぐ紫外線で、結界が焼かれている。見ると、結界を押しつけて、青い球体が上昇してくる。

隠された知恵のシンボルたる五芒星を内包した球体は、ゆっくりと二つの太陽に向かって、淡い紫色の空を昇っていく。そのとき、あの球体は、移動図書館はわざとゆっくりと帰っていくんだ、と思った。きつと、ポリュヒウムニアがオレに見せるためにそうしているんだ。

「アンカーも打たずに、いきなりダイブしないで！ 危険でしょう！」イグニスを追ってきたラーラの声が背後から聞こえてきた。

イグニスは答えずに、その球体をじっと見つめている。

「ねえ、聞いているの！」

「いいかげん、おれのことほつといてくれ！」イグニスには振り返らずに怒鳴った。「……だ、だから、そんな言い方……しないでよ」

ラーラの声の様子が変だった。いままでに聞いたことのないような、声の色だった。イグニスは思わず振り返る。どこかに飛び去ったのか、ラーラはいない。

イグニスは、青い球体が、二つの太陽に吸い込まれるようにして遠ざかり、見えなくなるまで、そこにいた。

やがて、二つの太陽は西に向かって傾いていく。イグニスはそれでも空を見上げていた。

あの空の向こうに、永遠があるのだ。イグニスはそう思った。四地球歳の自分が、愚かにも破壊しようとした永遠が――。

苦しくなつて、イグニスはゆつくりとオムニシアに向かって降下し始めた。彼は、自分に言い聞かせるように、ある言葉を頭の中で反芻していた。それは、膨れあがる自我に押し潰されそうな若者たちが、数万年前から繰り返してきた陳腐な言葉だった。でも、そうしなければ猛り狂う奔馬のように、オレはなにかを、自分がいちばん大切に思っているなにかを破壊してしまうだろう。そう思った。

オレは、失恋したんだ。

おわり